

あとがき

本書は、「九州の日独文化誌」と題して平成10年4月から16年3月まで72回にわたって『熊本大学学報』に連載したものを中心にして、その他明治村通信、日本古書通信等に発表した数篇を加えて纏めたものである。それに付録として以前、熊本大学教養部紀要・外国語外国文学篇（第22号、1987）に発表した「第五高等学校外国人教師履歴」を収録した。内容的には人物を扱ったものが大部分なので、「九州の日独文化交流人物誌」というタイトルにした。

私に『熊本大学学報』に執筆する橋渡しをしてくれたのは熊大文学部教授の田中雄次氏である。この学報には私の前に日本近代史の猪飼隆明教授（現・大阪大学教授）が「熊本歴史落ち葉拾い」と題して興味深いエッセイを連載していた。それを読んで自分もいつか何か書いてみたいと当時広報委員だった田中教授に雑談の中で話したことがあった。その後しばらくして猪飼氏が転出されることになったので、その後任の執筆者として田中氏が私を推薦してくれたのである。当初は20回ぐらいと思って引き受けたが、結局6年に及んだ。ただ連載中に残念だったのは、学報が冊子からホームページに変わった途端、それまで少しはあった反応が全くなかったことである。そこで少しでも多くの人に読んでもらうためには1冊にまとめるのが一番よいと考え、今回の出版となった。

九州とドイツ語圏との交流史は私の研究テーマの一つであり、本書もその成果の一端を成すものである。だが何分、掲載誌の関係でどれも短いもので、意を十分に尽くせなかったのは残念である。著者としては、本書の中に読者の興味を引く人物が一人でも見つければ、それで満足である。本書では明治初期から昭和前期までの間に活躍した人物のうち、九州と程度の差はあれ何らかの関わりのあった日本人及びドイツ人を取り上げた。その中には地理学者のリヒト・ホーフェンや御雇い外国人のベルツ、また衛生学者の緒方正規のように比較的知られた人もいるが、殆どは現在では忘れられたままになっている人々である。だが私は評価が定まった一部の有名な人々よりも、むしろ注目すべき功績を残しながら、あるいは興味ある生涯を送りながらも今ではすっかり忘れられた人々を発掘し、紹介することに興味があり、生きがいを感じる。今後もこの仕事は続けていきたい。なお、九州といってもその中では資料の関係で、私の住む熊本県の関係者がどうしても多くを占める結果になったことをお断りしておきたい。

最後に、本書中の肖像写真については多く既刊資料に依ったが、そのほかに今回未発表の貴重な写真を提供された上田新、相良憲一、野田倬、垣本知子各氏には厚く謝意を表したい。また、五高記念館の資料調査では東孝治氏にお世話になった。

平成16年3月20日

文学部研究室にて
上村直己